

宋名臣言行録

へ目次へ

序文

― 解題に代えて

一、明治大帝の愛読書

二、編者と編纂の目的

三、元本の体裁について

四、宋代の政治機構

五、その時代背景

本文

野木將典

一、明治大帝の愛読書

今から十数年前のこと、聖蹟櫻ヶ丘にある明治大帝の聖徳記念館を拝観したとき、そこに遺品の一つとして『宋名臣言行録』があり、かなり翻読されたあとのあるのを見て、明治大帝が明君のほまれ高いのは、ここに一斑の理由があるのを知り、深い感銘にうたれたのである。

明治大帝が『宋名臣言行録』を愛誦され、その内容について近臣に御下問になるので、いわゆる明治の元勳たちも、これを読んでおかないと大帝のお相手がつとまらない。もともと読書家であつた伊藤博文をはじめ、当時の元勳たちはみなこれを読破し、もって先人の蹤跡に学ぶところが多かつたという。

因みに、元勳の中ではひとり、桂太郎は読書家ではなかつた。それで彼の懐刀であつた徳富蘇峰は、これを惜しんで次のように述べている。「桂公がせめて『宋名臣言行録』の如きものを読んでいたら、彼はさらに俗抜けがして、その人格も洗練せられ、眞に明治の名臣として、模範的人物となり得たであらうと思」（蘇峰感銘録）と。

その桂太郎も口ぐせのように、「本は徳富さんが読んでくれる」と言い、自分の代わりに蘇峰が読んだそのエキスを、蘇峰から吸収しようとしていたのである。たしかに彼は蘇峰の意見には謙虚に耳をかたむけ、それを国政に反映させていったのであるから、彼も間接的にはこの本の功德を、充分に心得ていたわけである。

いったい人たるものが、心にひらめく本当の智慧、あるいは力強い実践力を養うにはどうしたらよいか。「よき師」「よき友」にめぐりあい、その誘掖をうけることができればそれに超したことはない。しかし、そのような「よき師」

「よき友」には、そうさらにめぐり逢えるものではない。そこで、すぐれた歴史の書籍や、言行録を読むことによって、古人を友として、先人に倣うという方法が、たいそう有益な修養のありかたである。

明治大帝はいみじくも、その効驗にしていたのである。なお、わが国において『宋名臣言行録』がはじめて版刻されたのは、江戸時代の初期なる寛文七年（將軍綱吉の世。一六六七年）である。しかし、それが有志の間に愛読されるようになったのは、文運が大いに開けた文化、文政期以降で、まず吉田松陰と橋本左内が深くこれを読んでいる。

わが国の国事多難のおり、この解決に一身を賭せんとした先学が、深くこれを読んで人にも奨めたから、ここにおいて本書はにわかには有志の間に愛読せらるるにいたり、幕末には註釈書も版刻せられた。因みに、明治大帝が愛読されたのは嘉永元年（一八四八）に、わが国で版刻せられたもので、現在は明治神宮に所蔵されているという。

二 編者と編纂の目的

この『宋名臣言行録』という書籍は、その題名からも察せられるように、三十（いうところの中国）の北宋時代（九六〇年—一二二六年）に輩出した文人政治家たちの、嘉言、善行を集めたものである。編者は、南宋の大学者、朱熹（一一三〇—一二〇〇年。朱子学の祖）で、彼が編集を思いついた動機は、その序文の中にくわしい。

それによれば、（予、近代の文集、及び事を記するの書を読み、其の載する所の国朝の名臣の言行の迹を觀るに、世教に補いあるもの多し。然れども、其の散出して統なきを以て、既に其の始終、表裏の全きを究むるなく、而して又、虚浮（根拠のないもの）、怪誕（怪しくとりとめのないもの）の説に汨さる。予、常に之を病う。ここに於て其の要を

擬い取りて、聚めてこの書を爲り、以て記覽に便す。なお恨むらくは、書籍備わらずして、遺闕るす所の多からんことを。嗣ぎて得る所あらば、まさに續きて之を書すべし」と。

すなわち、宋朝が盛んであった時代の、すぐれた文人政治家たちの言行を、広く典籍の中からとり集め、これを世教に補いあらしめようとして綴ったものであり、挿話を拾い集めるにあたつては、もちろん眞偽のほどを吟味して、いい加減なものは採らなかつたというのである。

また、朱熹はこの序文の中で、「まわりに本が少なく、欠落したものが多い」との意味を述べているが、それでも彼が引用した典籍は、その主なものだけでも七十余種もあり、そのほか行状（個人の履歴）、墓誌銘、神道碑（頌徳碑）など九十余種からも採られている。どこから引用したかについて、挿話ごと、また、どこから引用したかについて、挿話ごとに出典が示してあるので、これによれば朱熹が書いた部分（創立）は一パーセントあるかなしである。文字どおり糊とはさみで抜萃したものであるが、朱熹が苦心したところ、その取捨を通じて、名教に照らして健全なもの、後世の殷鑑となるべきものを、これでもかこれでもかと、数多く提供しようとしたことがある。

三 元本の体裁について

なお、『宋名臣言行録』という題名は俗稱である。朱熹が撰した原題では、『王朝名臣言行録』と『三朝名臣言行録』の二つに分かれていた。五朝というのは、宋朝の始祖、太祖（趙匡胤）にはじまり、太宗、眞宗、仁宗、英宗とつづく五人の天子の時代のこと。三朝というのは、それにつぐ神宗、哲宗、徽宗の三人の天子の時代のことである。

それで五朝の方は前集と呼ばれ、前集は全十巻、後集は全十五巻から成っている。それは宋朝がシナ全土をほぼ支配していた北宋の時代（約百七十年間）の主な文人政治家を対象として採り上げたもので、その数は九十七名に上る。ところが、その後、南宋の時代に入って、それも終わりに近づいた理宋^{りそう}の世に、李幼武^{りようふ}（字は士英^{しえい}）のが朱熹の例にならって続編を作った。『四朝名臣言行録』（全十六巻）『四朝名臣言行続録^{ぞくろく}』（全十巻）、『皇朝道学名臣言行外録』（全十七巻）である。それで後世、広義に『宋名臣言行録』という場合は、李幼武のも合わせて五集、全六十八巻というようになった。

ただ、李幼武が対象とした南宋の時代は、国家に昔日の精気がなく、いつたいに文弱に流れた。学問や思想は異数の発達をみたが、天子は奢侈に耽^ふって国政をかえりみず、妄臣は時を得て横行し、財政は破綻にひんし、外圧にはしきりに脅かされていた。国は人によって栄え、人によって亡ぶという理からいっても、真に伝えるべき政治家は乏しかった。

したがって後の世に覆刻される『宋名臣言行録』には、李幼武の撰したものは除かれることが多い。

ところで、朱熹が名臣の名において撰した者は、さきにも述べたように九十七名の多きに達する。約百七十年間にこれほど多くの者が輩出したからには、とつぜん名臣たる者の尺度は甘い。名臣というからには、天子を補佐して権力を左右できる政治的人間で、その中から多少にかかわらず、有益な挿話を残している者、と解釈しても間違いない。

四 宋代の政治機構

宋朝の天子は、誰とともに天下を治めるのか。それは科挙制度によって生まれた支配階級、士大夫しだいふとともに天下を治めることになっていた。士大夫というのは、漠然と儒教的知識人という場合もあるが、具体的には科挙の制度のもと、その試験に及第して官の資格を得た者である。

科挙の試験では、儒学の教養を必要としたから、これに及第して高級官僚となった者は、いわば文人的政治家（文人でもあり政治家でもある）である。これが当時の支配階級で、いわば士大夫である。科挙には天子が親しく審査する殿試があり、及第した者は「天子門生」（天子の門下生）といわれて羽振りをきかせた。

宋代の士大夫（文人政治家）たちが、一身の利害を顧みずに国家のことに任じ、天子に忠誠をつくそうとしたのは、このような制度のもと、天子との結びつきを強く自覚していたからにほかならない。その上、基本的な教養が儒学にもとづいていたので、その実践形態としての政治こそ、生き甲斐であると感じていたのである。

ところで、彼らがとりこまれた官界は、複雑な政治組織になっていた。この中で彼らは激しく競いあい、語りつぐべき名を後世に残すことが、男子たるものの本懐であるとしたのである。さて、その複雑な政治組織について、およびそのことを説明しておかないと、『宋名臣言行録』は理解しにくい。

まず、名臣の列に入るには、自己の力を用うべき地位に就かなければならない。中央政府には、中書門下省ちゅうもんしやう（民政をつかさどる所で、中書省ともいう）、樞密院（軍政をつかさどる）、三司（財政をつかさどる）があった。

その中書門下省の長官が「宰相」であるが、公式な名稱は「同中書門下平章事」、略して「同平章事」といった。その下に「副宰相」としての「参知政事」（執政）がおかれた。なお、「宰相」も「副宰相」も一人ではなく、複数名がおかれた。複数にしたのは、権力が一人に集まらぬようにし、お互いに牽制させるためである。

中書省には、このほか「翰林学士」といって、詔勅の起草官があり、これは天子の秘書官であつた。また、「知制誥」といって、宰相の名で制詞を起草するものや、「館職」といって天子の図書を管理するもの等があり、これらは執政につぐエリートであつた。

御史台は、中書省、樞密院、三司から独立下機関として設けられ、朝廷の監察をつかさどつた。すなわち官僚たちの不正を摘発したり、失敗を正したりするもので、いわば目付役であり、その長官を「御史中丞」といった。

地方の組織は、まず全国を十五の「路」に分け、その下に「府」「州」「軍」「監」の行政区画を設けた。「県」や「鎮」はその下である。「略」には、師、漕、憲、倉の四司がおかれ、「府」医家を管轄した。「府」以下には行政長官として「知」（知事）がおかれた。「知」のほか「通判」という官があり、「知」牽制する役割になつてゐた。

ところで、『宋名臣言行録』で挙げられた名臣九十七人のうち「宰相」の経験者が三十三人、「副宰相」が二十八人で、全体の三分の二を占める。そのほか翰林学士、御史中丞、知制誥といったエリートがつづく。因みに、北宋時代を通じて、宰相は六十余人あるが、朱熹が名臣の列に加えたのは、その半分ほどに過ぎない。儒教的な倫理観から、朱熹が半分ほどは除いたわけである。

宋朝（北宋）の行政機構

中央組織

中書門下省 — 民生

同中書門下平章事（宰相）

參知政事（執政）

翰林學士院

翰林學士

舍人院

知制誥

館職

大學士・學士・直學士・待制

樞密院 — 軍政

三司 — 財政

（塩鉄部・度支部・戸部）

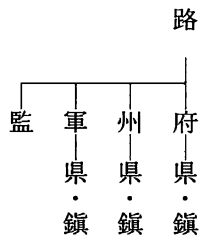
御史台 — 糾察

御史大夫（兼官）・御史中丞ちゆうじやう

地方組織

路（唐の「道」に代わるもの）

師・漕・憲・倉の四司



（府・州・軍・監・県には、それぞれ〔知事〕を置いた。）

五 その時代背景

空前の大帝国であった「唐」から滅亡して、五代・十国とよばれる混沌たる時代が、五十余年間もつづいた後、「宋」が成立して北伐・南戦しながら、ついに天下統一したわけである。「宋」が成立した九六〇年という年は、わが国では平安朝時代の前期で、村上天皇の治世であった。

それから一六七年後（一二二七）、宋の朝廷は「金」の侵略にたえかね、国土の北部を放棄して南へ移った。すなわち都を汴京（今の開封）から臨安（今の杭州）に移し、シナの中・南部を保つだけ、いわゆる「半壁の天下」となった。これより以降を「南宋」といい、それ以前を「北宋」という。

〔因みに、その「南宋」が滅亡したのは、それから、さらに一五〇年後（一二七六）で、わが国では鎌倉時代の後期、すなわち元寇（文永、弘安役）の前後であつた。「元」の勃興期にあたり、これに併合されたのである。〕

北宋（宋）は始祖の太祖（趙匡胤）が、みずからも西周の節度使から身を起こしただけに、各地の節度使―藩鎮―の跋扈を恐れていた。かの大帝国の唐朝が倒れたのも、節度使の勢力がいたずらに強大であつたこと、宦官が朝政を台なしにしたこと、等に大きな原因があつた。

それで北宋は当初から、節度使の勢力を削ることに苦心し、危険な節度使を文官に代えた。文治主義を標榜し、中央集権の実はあがつたが、こうして地方の軍備を縮小した結果は、外敵にたいする防衛力が手薄になつた。北方には契丹族のたてた「遼」があり、やがて女真族のたてた「金」がこれに代わつた。西方にはチベット系のタングート族のたてた「西夏」があり、北宋の弱体な武力では、これらと力で対抗することはできなかった。

それで、これら異民族の進入にたいしては、しばしば和議を申し入れて貢物をもって宥め、辛うじて平和を保つた。りさまであつた。外交的には屈辱的な条約をしばしば結んだが、しかし内政的には叛乱などがほとんどなく、治安のよい安定した社会をもたらした。

学問はしだいに普及し、科擧の制度は確実に根を張り、社会は文明におもむくとともに、いわゆる管理社会が根づいた。しかし、よい裏には悪いことがともなうもので、社会の久しい固定化から人心はようやく進取の氣象と剛健の

風を失った。久しい太平によって兵団の士気も弛緩し、社会の矛盾も崩してきた。

その渦中にあつて、天子とともに天下を治めるための名臣たちは、強い意志と厳しい議論をもつて、これを振興刷新しようと努力した。太祖、太宋の草創期から眞宗の世に宋朝は上りつめ、名臣たちも力を合わせて事に当たったから、次の仁宗の世もなお繁栄を失わなかった。

この時代、名臣たちの風格と識見とが、おのづから（士道）を確立し、それは南宋に至つて朱熹を中心とする諸儒によつて、理論的に肉づけられ、「宋学」としてわが国にも相当な影響を与えることになる。しかし、神宗から以降は、群臣が朋党を結んで争い、理屈がさきに立つて紛争は止まるところを知らぬありさまとなつた。もはや諸名臣の努力も、勢のおもむくところを如何ともし難く、国家を再造するに足る英傑も現れなかつたので、ついに「北宋」はおわりを告げ、都を揚子江の南方に移したのである。

本

文

趙 ちやう

普 ふ

藩鎮の力を奪うべし

わが社稷の臣なり

一榻のほかは他人の家

初一念を貫いて

刑賞は天下の刑賞なり

事態を忽にすべからず

曹 そう

彬 ひん

主を欺かざるもの

輜の中味は

分を侵すの副將を斬れ

みだりに武を用いず

掠奪暴行を断つ

部下を礼遇する

李 り

沆 こう

李文靖は眞に聖人なり

事を成すに慎重

事を喜ぶの人を用いざれ

論語を座右の書に

才能と人格は別である

私事にかまわず

巢林一枝の心境

張詠の評言

呂 りょ

蒙 もう

正 せい

大国を治るには

水清ければ魚住まず

人の過ちを知るなきにしかず

器物の樂みなし

善く人を用うるのみ

張 ちよう

詠 えい

戦いには潮時がある

広く人にたずねよ

公人としての心得

名利に恬淡なり

知恵はめぐりさざれば腐る

事に臨んで三難あり

諸葛孔明に比せらる

王 わう

旦 たん

朝廷に人あり

天子には天下という富が

規律は自分に引き当てよ

冠準を薦める

人の落度をかわす

私財を蓄えず

冠 こう

準 じゆん

御衣をとらえて離さず

悪政のもと災害あり

俗僚どもの緊張

見幕は当るべからず

宰相のひげを拭うもの

宰相らしい宰相

人生いずれの処にか逢わざらん

范 はん

仲淹 ちゆうえん

論説は仁義にもとずく

胸中に数万の兵あり

大軍一たび動くとき

軍中に范中淹あり

明党の益を論ず

人民全体が泣きを見るよりは

石介を諫官とするを止む

人材なきにあらず

道義の樂みあり

先憂後樂

杜と

衍えん

われらの知事さまだ

内命書を封還する

みだりに圭角を露わすな

目立とうとするな

信を人の腹中におく

蘇そ

洵じゆん

賈誼でも敵うまい

厚葬は道にあらず

弁姦論を著わす

人情にもとるは奸臣なり

欧お

陽よう

修しゆう

進むを同じくせず

朋廢論をつくる

占いを信ずべからず

大綱を総ぶるのみ

民を治めるは病を治むることし

行政を簡素であれ

政治は寛を善しとす

私怨をいだかず

六一居士

文人あい讓らず

韓かん

埼き

成敗は天にあり

常に杜稷に関わる

つとめて小人を容る

車の行くべきを主とす

小人とつきあう道

軽率に人を薦めるな

じつに点が扶持す

喧嘩口論に加わらず

ものには壽命あり

経論の才ある人なし

平素の徳行を心がけよ

欧陽修は今の韓愈か

若い時に純正に

下心を持つな

富ふ

弼ひつ

この君ありてこの臣あり

天子も怒ることあり

人君は天を畏れよ

義は忠に言は親し

野にあるも建言す

君子と小人を弁ぜよ

王おう
安あん
石せき

つむじまがり

天下の流俗をかえよ

奴隸を解き放つ

科挙を改む

失意の晩年

輕薄の徒を嘆く

司し
馬ば
光こう

天下の安危を念とす

天子の心得六ヶ条

台諫たる者のつとめ

祖宗の法は変ずべからず

才徳ならび用いよ

王安石の人品を評す

弁口の徒は国を傾く

大賢は大愚に似たり

小人は手に入れたものを放さぬ

天災を救うの道

声望のすさまじさ

徳望は内外を蓋う

司馬光がお見通しだ

呂
公
著

至誠なれば天災なし

治を致すの実なきは何ぞや

徳を治るの要は

国事は晦寂に付す

文
彦
博

幼にして慧悟

事に臨みて術あるべし

政敵をも重用す

上に対して恭しきこと甚し

蘇
軾

韓琦の大量に服す

東坡居士と号す

司馬光にひるまず

いつでも庭訓を

流刑地での生活

溫柔敦厚の徳

范
純
仁

門下に多く賢士を延く

著作林のいわれ

正人を失わざらんと願う

最夫の名言を服膺す

忠怒の二字を愛用

人材を求めて已まず

劉^{りゅう}

安^{あん}世^{せい}

自己評価に厳し

妄語せざるより始む

殿上の虎

王安石の妄語

王安石の学は邪なり

玉のごとき風格